

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 27 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2012～2016

課題番号：24320079

研究課題名(和文)シベ語の体系的文法と辞書の作成

研究課題名(英文)Grammar and Vocabulary of the Sibe language

研究代表者

久保 智之(KUBO, Tomoyuki)

九州大学・人文科学研究科(研究院)・教授

研究者番号：30214993

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 10,600,000円

研究成果の概要(和文)：シベ語の体系的文法の作成については、アクセントとイントネーション、動詞の終止形・連体形・動名詞形が文末に現れる場合のモダリティを中心に、従来にはない詳細な記述を行い、さらに、動詞の形態統語的機能、これらの形式が文末に現れる場合のモダリティとそれに文がとるイントネーションの関係を中心に音韻論・形態論・統語論・意味論的記述の体系化を行なうことができた。
辞書の作成についても、動詞の collocation や形容詞を中心として、文法的特徴の記述を行なうことができた。

研究成果の概要(英文)：We have made a systematic description of the grammar of Sibe, especially, in the areas of phonology (e.g., accent, intonation), morphology, semantics (e.g., modality of verbal suffixes and verbal clitics), and pragmatics. We have also made a vocabulary of Sibe, to include the collocational information of verbs and adjectives.

研究分野：言語学

キーワード：シベ語 文法 辞書 音韻論 形態論 モダリティー

1. 研究開始当初の背景

研究代表者の久保は、これまで主に音韻論・形態論の分野でシベ語の研究を行ってきた。研究分担者の児倉徳和(当初は日本学術振興会特別研究員)の研究は、意味論・語用論の分野である。しかしいずれも、体系的な研究とは成っていなかった。2011年夏に、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所において、シベ語の集中研修(5週間、100時間)が行なわれ、久保と児倉が日本人講師を務めた(同研修は、日本人講師とネイティブ講師がペアで授業を行なう)。その際、教科書を作成したが、その内容は、基礎的かつ体系的であることを目指した。しかし、次のような問題点が浮き彫りになった。

- (1) 音韻論では、イントネーションの機能や漢語からの借用語のもつ体系性が、十分に説明できなかった。
- (2) 形態論では、同一形態素が、世代によって、音型を異にすることはもちろん、音韻論的振る舞いを異にすることがあり、教科書の記述に苦勞する部分があった。
- (3) 統語論では、使役・受身構文の体系の解明が十分でなく、教科書の説明に不十分なところがあった。
- (4) 意味論では、アスペクトやモダリティの体系の解明が十分でなく、教科書の説明に不十分なところがあった。

これらの反省を踏まえ、不十分だった点について、これまでのデータを見直した上で、もう一度調査をし直す必要があった。世代差や方言差についても、体系的な調査が必要であった。

2. 研究の目的

本研究課題の目的は以下のとおりである。

- (1) 体系的なシベ語文法を完成させる。具体的には、次のとおりである。

音韻論：イントネーションの詳細な記述、漢語からの借用語の音韻論を完成させる。

形態論：どの接辞がどこまで生産的なのか、網羅的に明らかにする。

統語論・意味論：使役・受身構文の詳細な記述を行なう。アスペクトの詳細な記述を行なう。さらに、名詞文・動詞文などの基本文型はもとより、さまざまなモダリティ表現(～しよう、～してくれ、～したい、～だったらなあ)に至るまで、詳細な記述を行なう。これらについて、世代差や方言差も記述する。

- (2) シベ語辞書を完成させる。

どの格助詞を取るかを示す必要がある場合

などは、例文も示す。世代差や方言差も記述する。

3. 研究の方法

これまでに、日本に数人在住するシベ語の話者、および中国新疆ウイグル自治区のシベ語の話者を対象として、対面して文法および語彙情報を引き出す形式の言語調査を続けてきた。本研究では、新たに、中国新疆ウイグル自治区在住の若年層の優れた話者の協力を得ることができた。この話者を研究協力者として、現地での方言調査なども、今回、ある程度行なうことができた。今後の研究においても、新たな展開が期待できる。

4. 研究成果

- (1) シベ語の体系的文法

動詞の終止形・連体形、動名詞形の形態論・統語論・意味論・音韻論からの総合的研究

シベ語において、終止形は専ら文末に立つ形式であり、動名詞形は「彼が来たの/こと」のような名詞節を形成する形式、連体形は「昨日来た人」のように名詞修飾を行なう形式であるが、連体形と動名詞形は文末にも立つことが可能である。分担者の児倉は、終止形、動名詞形、連体形のそれぞれが文末に立つ場合のモダリティ的な意味の違いをもとに、これらの形式の統語論的特徴、形態論的特徴と音韻論的特徴を総合的に分析し、以下のような結論を得た。

- ・終止形と動名詞形は連体形にモダリティを表す接語 =i, =ŋe が後続した形態論的構造をもつ。
- ・接語 =i と =ŋe はそれぞれ発話参加者の心内に新たに追加される情報と、発話参加者の心内から読み出される情報というモダリティの意味を表す。
- ・接語をとらない連体形は、発話参加者の心内の情報の操作がないことを表す。
- ・連体形は文末に現れた際、終止形、動名詞形と異なるイントネーションをとるが、これは心内の情報操作の有無と関連している。
- ・発話参加者の心内の情報を操作しない連体形のみ名詞修飾が可能なのは、心内の情報操作の単位に関する制約(情報の追加は文単位であり、情報の読み出しは名詞(句・節)単位である)が、連体形にのみ働かないためと説明される。

これらの成果は、児倉(2013)、Kogura (2013)として公刊した。

補助動詞の意味論

動詞・名詞・形容詞に後続してモダリティの意味を表す補助動詞 bi- (ある・いる)、o- (なる)、yela- (立つ・止まる)について意味論的分析を行なった。この成果は児倉 (2016)として公刊した。さらに、 の成果と の成果の一部は児倉が 2013 年に東京大学大学院人文社会科学系研究科に提出した博士論文「シベ語のアスペクト・モダリティの体系—知識状態の変化にもとづく体系化—」としてもまとめられている。

(2) 方言差を含めたシベ語の現地調査

本研究課題では 2012 年、2013 年、2016 年(2 回)の計 4 回の現地調査を行なった。うち、2016 年に行った 2 回の現地調査では、イリ師範学院の賀元秀教授、および現地でシベ語の復興活動を行なう孟栄路氏の協力により、チャプチャル・シベ自治県およびその周辺各地の方言資料を採録することができた。

【国際的連携体制の構築と国際シンポジウムの開催】

本研究課題は中国で現地調査を行ったが、現地調査を安定的に行うために 2012 年夏より現地の研究機関であるイリ師範学院人文学院の賀元秀教授をはじめとしたシベ語研究者との研究交流を継続的に行なっている。特に 2016 年にはイリ師範学院にて第 1 回錫伯族言語文化国際学術討論会が開催され、児倉が参加し、研究発表を行った。またこの際、イリ師範学院よりシベ言語文化研究センターの副研究員を委嘱され、連携関係がさらに強化された。

さらに 2016 年 10 月には、九州大学および東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所において第 1 回シベ語言語文化国際会議を主催(共催)し、中国から賀元秀氏(イリ師範学院シベ言語文化研究中心)、庄声氏(東北師範大学)、孟栄路氏、チェコから Veronika Zikmundova 氏が参加し、世界のシベ語研究者が集まった。本会議は今後隔年で開催することが決定しており、本研究課題によって、世界のシベ語研究ネットワークの基礎が構築できた。

また、韓国・ソウル大学の Kim Juwon 教授、Ko Dongho 教授とは、同氏らが主催する SIAC (Seoul International Altaic Conference) への参加や、ソウル大学での研究打ち合わせなどで、頻繁な学術交流を行なった。

【社会への研究成果還元】

本研究課題は、2011 年に東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所において開講した言語研修のための教材作成の過程で得られた知見と問題意識を端緒としていることから、本研究課題の成果も、語学教育として分かりやすく、習得に適した形で発表すべき

であるとの考えから、2012 年度より「シベ語研究会」と称する研究会を、合計 6 回主催し、さらに 2014 年度からは、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の事業である「言語研修フォローアップ・ミーティング」との共催により、計 3 回の研究集會を開催した。

また、分担者の児倉は、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所において「フィールド言語学カフェ特別編」と称するイベントを 2 回開催し、講演も行ない、社会への成果の還元を図った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 8 件)

久保 智之「音韻領域の諸相」京都大学博士論文、2016 年、ix+239p、査読有り。

久保 智之「満洲語の数詞とシベ語の数詞についての若干の覚え書き」『九州大学言語学論集』第 36 号、九州大学言語学研究室、2016 年、pp.107—115、査読無し。

児倉 徳和「シベ語の補助動詞 biXe と「思い出し」」『九州大学言語学論集』第 36 号、2016 年、pp.129—146、査読無し。

Kogura, Norikazu “On the form and function of the verbal suffix -mi (-mbi) in Sibe: Is it a vestige of subject agreement?” *Proceedings of the 12th Seoul International Altaic Conference*, The Altaic Society of Korea, 2015 年、pp.23—33、査読有り。

児倉 徳和・久保 智之「シベ語の世界」、中川裕監修・小野智香子編『ニューエクスプレス・スペシャル 日本語の隣人たち』白水社、2013 年、pp.72—91、査読有り。

児倉 徳和「シベ語の三つの動詞完了形 -Xe, -Xeŋe, -Xe の機能と節の階層：なぜ -Xe のみが連体用法を持つのか？」『北方言語研究』第 3 号、北海道大学大学院文学研究科、2013 年、pp.155—174、査読有り。

児倉 徳和「シベ語のアスペクト・モダリティの研究—知識状態の変化にもとづく体系化—」東京大学博士論文、2013 年、xiii+242p、査読有り。

Kogura, Norikazu “On the suffixes -Xe and -Xe in Sibe”, *Proceedings of the 12th Seoul International Altaic Conference*, The Altaic Society of Korea, 2013 年、pp.261—272、査読有り。

〔学会発表〕(計 16 件)

久保 智之「シベ語とホルチン・モンゴル語の所有構造」、2016 年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会、京都大学ユーラシア文化研究センター(羽田記念館)(京都府・京都市) 2017 年 3 月 30 日。

児倉 徳和「シベ語の補助動詞 o- のテンポラリティとモダリティ」2016 年度ユー

ロシア言語研究コンソーシアム年次総会、京都大学ユーラシア文化研究センター（羽田記念館）（京都府・京都市）2017年3月30日。

久保 智之「音声言語と文献言語と歴史言語学—シベ語と満洲語と歴史言語学」日本歴史言語学会大会、九州大学（福岡県・福岡市）2016年11月19—20日、招待講演。

児倉 徳和「錫伯語的情態系統（シベ語のモダリティの体系）」第1回シベ語言語文化国際会議、九州大学・東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（福岡県・福岡市および東京都・府中市）2016年10月26—30日。

久保 智之“siwe'gisuN=i aŋe=i gisuN=we afsi are-mi à'（シベ語の音韻表記）”第1回シベ語言語文化国際会議、九州大学・東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（福岡県・福岡市および東京都・府中市）2016年10月26—30日。[シベ語による発表]。

児倉 徳和“論錫伯語助動詞構成的意欲性範疇（シベ語の助動詞により構成される意志性のカテゴリについて）”首届錫伯族語言與文化國際學術研討會（第1回錫伯族語言文化國際學術討論會）、伊犁师范学院錫伯語言文化研究中心（イリ師範学院シベ語言語文化研究センター）、イーニン市（中国）2016年9月9—11日。

児倉 徳和「論満語及錫伯語の動詞形態系統簡化（満洲語とシベ語における動詞形態体系の簡略化）」国学とシルクロード歴史文化研究国際學術討論會（満学セクション）/第2回国際満文文献學術研討會（国学とシルクロード歴史文化研究国際學術討論會（満学セクション）/第2回国際満文文献學術研討會）、馮其庸學術館(Feng Qiyong Academic Hall、無錫市（中国）2016年8月24—28日。

児倉 徳和「シベ語における意図と知識についての予備的考察」Luncheon Linguistics、東京外国語大学語学研究所（東京都・府中市）2016年4月13日。

久保 智之「新疆シベ族の満洲語の読音」2015年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会、京都大学文学研究科附属ユーラシア文化研究センター（羽田記念館）（京都府・京都市）2016年3月26日。

児倉 徳和“The use of auxiliaries in engagement in Sibe (Xibe)” Symposium on evidentiality, egophoricity, and engagement: descriptive and typological perspectives、Stockholm University、ストックホルム（スウェーデン）2016年3月17日。

児倉 徳和「錫伯語動詞後綴-Xeŋe 的語法功能及其時態、人称指称上的表現（シベ語動詞接辞 -Xeŋe の文法機能とそのテン

ス・人称指示への現れ）」The third international conference on Tungus languages and culture、貝爾大酒店 (Baier Hotel)、ハイラル（中国）2015年8月10—11日。

児倉 徳和「シベ語における Evidentiality と Reality—補助動詞 bi-「ある」と o-「なる」の分析から—」言語の対照および類型論的研究の会研究会、津田塾大学（東京都・渋谷区）2015年5月15日。

久保 智之「満洲語とシベ語の数詞についての若干の覚え書き」2014年度ユーラシア言語文化研究コンソーシアム年次総会、京都大学ユーラシア文化研究センター（羽田記念館）（京都府・京都市）2015年3月27日。

児倉 徳和「ツングース諸語の動詞形態論における母音語幹と子音語幹の対立」2014年度ユーラシア言語文化研究コンソーシアム年次総会、京都大学ユーラシア文化研究センター（羽田記念館）（京都府・京都市）2015年3月27日。

児倉 徳和「シベ語の動詞接尾辞 -mi、-Xeŋe とツングース諸語における述語人称標示」日本言語学会第149回大会、愛媛大学（愛媛県・松山市）2014年11月14—15日。

児倉 徳和「シベ語の動詞 o-「なる」の語用論的機能」日本言語学会第145回大会、九州大学（福岡県・福岡市）2012年11月24—25日。

〔図書〕（計0件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

○取得状況（計0件）

〔その他〕

国際研究集会主催：第1回シベ語言語文化国際会議、九州大学箱崎キャンパス・東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2016年10月26-30日。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

久保 智之（Kubo, Tomoyuki）
九州大学・人文科学研究院・教授
研究者番号：30214993

(2) 研究分担者

児倉 徳和（KOGURA, Norikazu）
東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・助教
研究者番号：70597757

（2012年度より2013年度まで研究協力者）

(3) 連携研究者

なし

(4)研究協力者

ズイクムンドヴァ , ヴェロニカ
(Zikmundova, Veronika)
Charles University (チェコ) 講師

庄 声 (Zhuang, Sheng)
東北師範大学 (中国) 准教授

孟 栄路 (Meng, Ronglu)
瑟公錫満文化伝播中心 (中国)